平成 28 年度　関西インカレ観戦記　　新21回 絹田清昭

今年も観戦記を担当させていただく。私が書くと長くなるので読むのが大変になるが、4 日間観戦できる OB が殆どいないので今年もお鉢が回ってきた。ご勘弁いただいて最後までお付き合い願いたい。
今年の関西インカレの結果は、男子が 2 部 6 位（天理大 160、大阪大 136、摂南大 98.5、甲南大 67、大経大 67、神戸大 64)、女子は 17 位(7.5 点)（昨年 10 位、27 点）と男女共残念な結果に終わった。
戦前から男子は短距離、投擲の層の薄さが指摘されていたが、それに加えて主力選手が故障したりしたのでは致し方ない結果とも言えよう。女子も 8 位入賞を目指していたが、スーパーエースの西田文香が卒業した後では苦戦は否めず遠く及ばなかった。
男子 1 部は関学が全種目に充実、圧倒的な勝利(200 点超、2 位が 100 点レベル)を勝ち取った。京大も 8 位で残留。降格は龍谷大とびわスポ大、今年の天理、阪大程ではないにしても 2 部ではやはり強いだろう。
男子 2 部は天理が最有力とみられていたが下馬評通り 160 点で圧勝、阪大も質量とも充実、競るとみられていた摂南大を大きく引き離し 140 点で堂々の 2 位だった。その他では短距離を中心としての甲南大の躍進が目立った大会だった。
女子は 400mで日本の１，２位が競い、長距離も立命を軸に充実。また甲南、成蹊のリレー勝負も見ごたえがあり決して関東に引けを取らない競技内容だった。関西女子の充実が目立つ。
このように 5 日間にわたる関西インカレ 2016 も終了したが、神大としてはこの結果を反省・分析し来年へ向けての強化を始動させるべきであろう。
以下観戦記を取りまとめてみた。現役諸君が別途全競技の結果を掲載してくれるはずなので、ここでは偏りはご勘弁いただくとして、主に予選を通った競技についてのみ分析も交えて記載することとする。
それぞれを詳しく書きすぎて長文になってしまった。ご容赦いただきたく思う。

5 月 12 日(木)

3 日間続いた雨も上がり、さわやかな薫風が吹き抜ける大阪長居競技場で本年度も関西インカレのトラック＆フィールドが開始された。4 月 20 日のハーフマラソンで、丸岡が好記録で 2 位と幸先の良いスタートを切ったのは既報に詳しいが、いよいよ今日からがトラック＆フィールドの本番だ。

十種　宮崎始動

最初の種目は十種 100mの宮崎（10 種 6293 点　ランキング 4 位、昨年 3 位）は調子が上がっていると聞いていたが、早速 11 秒 24 の好記録で組トップ。高得点を予感させるスタートとなった。

女子走高跳　日高水樹(1 年）1m65　学内新　7 位

同時に始まった女子走高跳では新人の日高水樹(1m69　11 位)が出場。1m69 の資格記録は高校時代のものだが、ゆったりとしたフォームで 1m65 をクリヤして見事 7 位入賞。1m69 は抜き足が僅かに触れて落とした。惜しい！　しかし 1m65 は学内新。今年中に 1m70 はクリヤできると見た。期待の新人だ。

1500m 予選　藤田は通過なるも･･･

藤田竣は軽く通過するも、濱野(4'09'06)、澤田（4’11’’’53）は予選落ち。濱野は身長もあり綺麗なフォームで（持ちタイム 4`4”30)ずっと期待しているが少し伸び悩んでいる。高校時代の記録(4`4”12)にも僅かに届いていないと聞く。積極的なレースで殻を破ってほしいものだ。王子の練習で彼と話をしたが、次回はもう少し前で走ってみますと言っていた。今年中に 5000m14 分台、10000m30 分台が目標とのこと。長距離のリーダーになったこともあり駅伝の中心だ。期待している。澤田は彼なりに積極的に走り自己新。ひとつの目安である 4 分 10 秒切りを本年中に目指してほしい。

男子 100m 予選　近藤　11″06　水野　11″11(自己新)で準決進出。

近藤、水野は共に 2 年生。昨年度が短距離の底だと言われていたが、漸く新しい芽が出てきた感あり。近藤は一浪だが高校で 10 秒台(10”92、200m21”88)を記録、ぼちぼち力が戻ってきた。水野は昨年 10 月入部でまだ半年だが今回記録を大きく短縮した。準決でどんな走りを見せてくれるか楽しみだ。

男子 400m 準決勝は植田　48″29　自己新(歴代 6 位)で決勝進出。

植田は昨年度より大幅に 400m の記録を短縮。走りにキレがある。専門の 800m にも期待が高まる。

女子 100mH 準決勝　　宮嵜(2 年) 14″50　　森下(3 年) 14″54

共に記録が伸びず予選落ち。やはり 14 秒 1～2 で走らないと決勝へは行けない。特に宮嵜は昨年度は 14”13 と学内記録を更新していたので残念だっただろう。早く昨年の感覚を取り戻してほしい。しかしそれが陸上競技というもので毎年記録が順調に伸びていけば苦労はない。なかなかそうはいかないのだが・・・。

男子 1500m 決勝　藤田竣 4′02″76　4 位

藤田は 3’56”51 を今季出しておりランキング 2 位。しかもここぞというレースを外さない。昨年からそのセンスに注目していた。レースは超スローペースで始まった。スピード型の選手に有利な展開だ。最後の 1 周でも団子状態。しかし藤田の位置取りはいい。残り 300m から鞭が入り叩き合いになったが最後の直線で力尽きた。800, 1500 型の選手に比べ、最後のスパート力に少し差があるように見える。勝とうと思えば、勇気がいるが前半からスピード型の選手のスパート力を奪うようなハイペースでの展開が必要だったかも知れない。女子の 1500m では 1500、5000 型の大阪学院大の新井さんが前半からハイペースで飛ばし、スピード型の選手を途中で突き放して優勝。口うるさいことを言うようだが、藤田君も 2 部ではレースを支配できるようなレベルに来たように思う。得意の 3000m障害でどういうレースをするか、クレバーな彼のことだ、きっとこのレースを活かすと見た。1500m は全体でも予選から超スローペースのレースが多く、最後の 1 周でも団子状態なので結構転倒者が出、有力選手で予選落ちした者もいた。1500m が格闘技と言われる所以でもあろう。余裕を残したいのはわかるが危険も多い。上位入賞を狙う選手はある程度人数を絞っておいてから楽をする方が安全のような気がするのだが・・・。

女子 400m リレー　高阪-宮嵜-永久-森下　49″47　予選落ち。

昨年は 48”83。やはり西田の穴は大きかった。今の戦力では相当頑張ったと言えるのではないか。

男子 400m リレー　上野-近藤-山田-水野　42 秒 53　予選落ち

11”0 の跳躍の永田(4 年)を温存しての布陣。兵庫リレーカーニバルの 400m リレーで少しピクッと来ており大事を取っての策。三段、幅に注力するための作戦でもある。1 走には砲丸投げの上野環太君が起用された。彼は砲丸投げの選手だが 100m を 11 秒 29 で走るスピードがある。しかし 2 走→3 走、3 走→4 走でバトンミス。資格記録の 41"25 から 1 秒以上遅い 42 秒 53 では予選敗退もやむを得ない。バトンパスの練習がそれほどできていなかったようなのが残念。昨年は 41 秒 91 で 7 位入賞している。メンバーは今年の方が強いはず。事情があったとはいえ悔いが残るレースだったのではないか？この上野君の起用は彼の本職、砲丸投げにも影響したかもしれない。
なお、この予選では昨年 39 秒 78 で走り、今年は 39 秒 68 の関西学生記録更新を目論んでいた絶対本命の関学が 2 走から 3 走へのバトンをミスしまさかの予選落。場内のどよめきを誘った。2 走の 100m 覇者多田君の調子が良すぎたらしい。米国もしょっちゅうやらかしている。400m リレーは怖い。

十種競技一日目　宮崎　合計 3494 点　暫定 2 位

100m 11"24　808 点、　走幅跳 6m77　760 点 自己新、砲丸投 11m24 560 点 自己新、走高跳 1m75　585 点 大学ベストタイ、400m 50”74　781 点 自己新。　非常に好調だ。学内新への期待が高まる。

5月13日(金)

朝から快晴微風の絶好のコンディション。しかもホームストレッチは若干の追い風。
好記録の予感と共に長居での2日目が始まった。

男子砲丸投 太田 11m65 自己新 8位 上野 11m01

太田は2年だが遠くからでも投擲の選手だとわかる立派な体格をしている。一方上野は3年生、このところ投擲を一人で支えてきた感があるが、今回は投擲が2枚揃い期待していた。しかし、太田の自己新で8位入賞は立派だが、上野は資格記録(12m17　3位)を1m以上も下回り入賞を逸した。太田は伝統的な投法だが、上野は100mも走れるスピードを活かしての回転投法。米国の選手に良く見かける。一発引っかかれば大きな投擲ができるが、オーソドックスな投法に比べ、調子によってばらつきが多いとも言われている。残念ながらこの日は全く調子が上がらなかったらしい。本人はリレーのせいだとは言わなかったが、影響はあったかも知れない。一度100mを全力で走ってから砲丸を投げるようなトライは必要なかったのだろうか？素人の考えそうなことだが気になった。この時点で昇格は絶望。

男子100m準決勝 水野 11'03自己新、 近藤 11'08 共に準決落ち。

二人ともタイムは悪くはないが、2部でも10秒台で走らないと決勝へは行けないレベル(ランキング10位が10秒89)となっている。今後の神戸の短距離はこの二人がキー。二人が今年中にも10秒台で走り、更に11秒0台が二人というくらいの布陣になると400mリレーでも41秒を切れるかも知れない。短距離のスピードは全ての競技の基盤だ。二人とも走る姿がいいので期待が持てる。今後に注目していこう。

男子 三段跳 瀧瀬 14m81 6位 山下 13m93 永田 棄権

昨年はこのトリオで2位、4位、8位で13点と大量点を稼ぎ今回も期待していた。特に永田は春先に幅跳びで7m44を跳び絶好調でもあった。しかし4月の兵庫リレーカーニバルで軽い肉離れの兆候があったので、それ以来無理をせずに本番に臨んだはずであった。しかし1跳目、踏み切ろうとして肉離れが再発。以降の競技を棄権。大事なポイントゲッターを失った。瀧瀬は前半の3回では3位につけていたのだが、その後記録を伸ばせず6位に終わった。彼のベストは昨年2位に入った14m83(ランキング5位)。ランキング上位3人は15m台なので今回の順位は致し方ない。来年の関西インカレでは15mジャンプでの優勝を期待しよう。幸い14m50を跳ぶ新人が入ってきたらしい。新しい跳躍チーム誕生を期待したい。

男子400m決勝 植田 48"19　5位 自己新歴代5位

植田はランキングは48秒82で13位だったが予選から好調、準決で48秒29で走っている。期待が高まる中、準決の記録も上回り、昨年までの自己記録（49秒02）を1秒近く短縮する記録で5位に入った。これで800mの連覇が現実的になってきた。予選から49秒27、準決48秒29と来てこの記録。力がついたものだ。因みにこの決勝では甲南大の三原君がなんと46秒68という1部よりも0秒3も早いタイムで優勝。小川監督の満面の笑みが印象的だった。

女子4×400mR 永久-米田-明瀬-上岡　3'58"78 歴代6位なるも予選落

跳躍の永久を1走に投入しての挑戦だったが決勝進出はかなわなかった。昨年の記録(3'51"36) より7秒悪く、改めて西田の存在の大きさがわかる。このことは昨年から予想されていたことで、1人1秒以上向上させて、という目標だったが、それほどすんなりと記録が伸びれば苦労はいらない。主力は殆どが800mランナーなので致し方ない面もある。因みにランキング10位が3分52秒。そこが目標となろう。

男子4×400mR 竹島-近藤-山田-植田 3'16"75（昨年は3'19"81で予選落ち）

一方男子は、資格記録が3分20秒32と10位にも入っていない。決勝進出を懸念したが、4秒近く短縮し上位で決勝進出となった。しかし上位予想校はメンバーを温存しており決勝は厳しい戦いが予想される。

男子5000m決勝 丸岡 14'49"84優勝 自己新 歴代5位、佐久間 15'27"79 大学初、

坂元 15' 48" 28

このレースはタイムレース。2 組目が丸岡と佐久間（1 年）。丸岡は春先出遅れていたがハーフで 1 時間 8 分 33 秒の好記録で 2 位。しかしスピードに関しては本人も不安があったそうだが、1 週間前の郡市の大会でほぼ自己記録の 14 分 50 秒で走り、最後のスパートも戻っていたので自信を持って出場したらしい。佐久間は高校時代 14 分 47 秒という凄い記録を出し、それで 1 組に入った期待の新人。レースは大経大が引っ張り 1000m3 分で進むが丸岡は上位でじっくり機会を窺う。佐久間もトップ集団の中盤につけ 14 分台ランナーの片鱗を見せる。しかし 3000m を過ぎて後退。丸岡は 2～3 番手につけて余裕の走り。4000m時点で丸岡は勝てるのでは、と思った。最後の 1 周に入る前、残り 200m からスパートか、と思いきや、カネが鳴ってすぐスパート。ダッシュに見えるほどスパッと出た。2 位以下をどんどん引き離し 50m 差をつけて圧勝。なんと最後の 1 周を 57 秒台でカバー。凄まじいスパート力を見せつけた。タイムも 14'49"84 と自己新。今大会での最も印象に残るレースだった。本人に聞くと 3000m あたりから勝てると思っていたとのこと。残り 1 周のスパートも 1 週間前の郡市の大会でテスト済とか。恐れ入りました。
佐久間は結局 15 分 23 秒と大きく遅れたが終盤盛り返したところもあり、駅伝に向けて貴重な戦力になり得ることを証明した。フォームも端正で無駄がない。早く高校時代の走りを取り戻してほしいものだ。
ハーフ自己新で 11 位と健闘した坂元も頑張ったがまだ地力不足か。ロードの方が好きなのかも知れない。

男子十種　宮﨑 総合得点 6588 点 2 位 学内新
（後半）110mH 15"19　827 点、円盤投 29m83 461 点、棒高跳び 4m00　617 点 自己ベスト、やり投 48m00 559 点、1500m 4'48"17　630 点 大学ベスト
十種の宮崎は円盤投げで少し躓いたが、その他はほぼ自己記録レベルでまとめ、自己記録を 295 点更新する学内新をマークし 2 位に入った。特に弱点だった棒高跳びで 4m をクリヤ。昨年の記録を 1m 更新。資格記録では 4 位だったが見事だ。因みに従来の学内記録は新 50 の王谷さんだったが、奇しくも二人は奈良の東大寺学園の出身。だから人生は面白いというべきか。十種は正に陸上競技全てを網羅。いつも一緒の顔ぶれで戦う為友人もできやすい。事実、宮崎も他校にでかけ練習したりしているらしい。今回の好成績はそういう努力のたまものだ。卒業までに 7000 点を目指したいと目を輝かせていた。

5 月 14 日(土)

いよいよアト 2 日だ。今日も好天である。

男子 200m 準決勝 近藤 22"47

予選で大学ベストの 22 秒 34 を出した近藤だったが、準決となると廻りの風景が変わる。後半硬くなったように見えた。ランキング 10 位が 21 秒 89 というレベルだが彼は高校時代 21 秒 88 で走っている。来年はきっと 21 秒台で上位入賞してくれるだろう。まだまだこんなものじゃあないはずだ。

男子 800m 準決勝 植田 1'58"11 、川植 1'59"07、 脇川 2'03"08

予選は見事に 3 人通ったが、準決は植田一人の通過となった。川植は今年に入って記録を 1 分 56 秒 1（ランキング 10 位）まで伸ばしてきた発展途上人。準決も惜しいレースだった。植田は 400m の疲れは残っていたようだが格の違いを見せて余裕の通過。植田は資格タイムトップ（1`51"25）で 2 位は 1`53"37。順当に 2 連覇するはずだが・・・しかし展開次第では番狂わせもあり得るのが 800m。油断はできない。

女子 800m 準決勝 明瀬 2'15"95 米田 2'14"32（決勝へ）上岡 2'17"22

女子 800m が昨年と一番メンバーが変わった種目であろう。この種目は神戸大女子のストロングポイントで米田、明瀬、上岡の 3 人が競いながら成長してきた。昨年の優勝タイムは 2 分 13 秒台だが、米田が 4 位（2`15"31）、明瀬が 5 位（2`15"57）と健闘した。本人たちの持ちタイムも 2 分 13 秒台、14 秒台なので 2 年になった上岡も含め 3 人での上位入賞を目論んでいたら、2 分 10 秒を切る 1 年生が 3 人も関西に入ってきた。特に東大阪大の石塚に至っては 2 分 6 秒台。超高校級で昨年からマイルの全日本のメンバーにも入っている逸材。大阪成蹊大の青山との 400m 決勝は事実上の日本一決定戦で大変見ごたえがあった。青山のタイムが 53 秒 09、追い込んだ石

塚は 53 秒 12 という凄まじいものだった。6 月の日本選手権でも二人のオリンピック候補選手間で今回と同じ戦いが繰り広げられるはずである。そういう中、米田はバネの効いた走りで無難に通ったが、明瀬、上岡は惜しくも決勝進出を逃した。特に明瀬は組運に恵まれなかった感あり。惜しかった。米田の決勝での奮闘を期待しよう。

男子 3000SC 藤田竣　9'13"57 優勝 自己新 歴代 3 位 藤田直 9'46"99

3000m 障害は一発決勝だ。この種目は近年、今年、大学院を卒業した日比が引っ張り得点を重ねてきた。特に昨年は日比が 9`14"67 で 3 位となり初めて表彰台に上がった。更に 2 年の藤田竣が 9'23"で 8 位に入り後継者としての名乗りを挙げたのは記憶に新しい。藤田は本年に入り 9`16"54 まで記録を伸ばしランキングトップ（1 部でも 8 位相当)。OB 報告担当の藤田直（4 年、持ちタイム 9`46”51）とダブル藤田でいざ出陣。「外さない」藤田竣がどのようなレースをするのか楽しみだった。ライバルは滋賀大、県立大、甲南大で 9 分 16~18 秒の持ちタイム。実は余り差がない。藤田の 1500m 3 分台のスピードをどう生かすかに注目。レースは甲南大とランキングには入っていなかった伏兵、大阪大 4 年吉田との三つ巴になっていいペースで進むがレースをリードしているのは藤田だ。吉田はハーフで 7 位、1 万 m の持ちタイムも 31 分 12 秒（ランキング 5 位）と相当の強豪。その持久力は侮れない。結構長身で 3000mSC への適性もあるようだ。2000m で甲南が脱落し藤田と吉田の一騎打ちとなる。最後までもつれたら藤田のスピードが生きるはずだと思って観ていたが、最後の 1 周手前から吉田が仕掛けた。藤田のスピードを十分意識しての勇気あるロングスパートに見えた。藤田はきちんと追走、余裕はあるようだ（吉田が出た時はやるな、と思ったらしいが同時に勝てるとも思っていたらしい)。バックは吉田が先行するが百戦錬磨の藤田は最後の水壕手前でスピードを上げ先に超えた。これは 3000 障害の鉄則で、障害の前ではスピードを上げろ、というもの。水郷では尚更だ。吉田も再度スパートして最終ハードル二人が並んだ。ゴールまで 60m。ここで藤田がもう一段ギヤを挙げて差し切った。タイムも歴代 3 位の好記録。昨年の日比の記録も更新した。まさに勝つべくして勝った印象だが非常に見ごたえのあるいいレースだった。伏兵ながら果敢に勝負を挑んだ阪大の吉田にも拍手を送りたい。もう一人の藤田直は最下位からペースを上げほぼ自己記録で走ったが惜しくも 9 位。いいところまで来ているのに勿体なかった。今後走る機会は多くはないだろうが地力はついてきているのだから、一度勇気を出してもう少し前の方でレースをしてみたらどうだろうか？　9 分 30 秒台で走れる力はあると思うが？

男子走高跳 佐野 1m90 入賞ならず

走高跳びは 2 部のレベルが高く 1 部と遜色がない。トップは 2m13 でランキング 10 位でも 1m98。このところ神大の走高跳を支えてくれている M1 佐野（資格記録 1m93）でも入賞は厳しい。1m90 はクリヤしたが及ばず。しかしこの種目を今年も支えてくれた。是非来年も跳んでほしいものだ。

男子走幅跳 瀧瀬 6m88 、大塚 6m54 予選落

7m44 でランキング 2 位の永田が肉離れで、瀧瀬(7m08 ランク 8 位)と大塚（6m74）の二人の出場となった走幅跳だが、瀧瀬は 9 位でトップ 8 に進めず昨年（11 位 6m67）に続き入賞を逸した。来年こそ。
瀧瀬は新主将となった。先日話をする機会があったが、バランスが良く、部全体の事を良く考えている
キャプテンシーのある学生だと感じた。100 名の部員を率いるのは大変だろうが、持ち前の肩の力を抜いた自然体で競技者とリーダーの二役をこなしていってほしい。今後の人生にも貴重な体験となるはず。

ところで走幅跳は女子で 6m 前後、男子で 7m 前後跳ぶ。観ていて滞空時間というものを感じた。彼らは相当空中にいるのだ。しからば跳躍選手は空中に浮かんでいるとき（走高跳でも棒高跳でも三段でも）何を考えているのだろうか？頭の中を何がよぎるのだろうか？こういうことを思うことはオカシイのだろうか？滞空時間の長い跳躍者の動きは実に美しい。男子で言えば 7m を大きく超す跳躍は本当に美しいしなかなか落ちてこない。ペタペタと地面を走るしか能がなかった元中長距離の私はそんなことを考えながら跳躍に見入っていた。陸上競技は記録もさることながら美しい動作を競う競技でもあると再認識した。

女子三段跳　永久 12m19 7 位　武村 12m07 大学初 歴代 2 位

M2 の永久の資格記録は 12m06（昨年５位、ランク 14 位、ベストは 12m29)、1 年の武村は 12m58（ランク 3 位、日本ジュニア優勝）の記録を持つ。武村はまだ実力を示せず入賞できなかったが、永久は 12m19 とベスト

（12m29）に迫る記録で昨年に続き 7 位入賞は立派。しかし全カレ標準にあと 1 ㎝。惜しい。本人は少し自信があったようで密かに 12m50 を狙っていたらしい。永久は専門の三段跳の他、走幅跳、400M リレー、1600M リレーと大活躍。さぞかししんどかったろうと思いきや実は楽しかったらしい。根っから陸上競技が好きなのだろう。きっと思い出深い関西インカレになったはずである。今後は全カレを目指すと語っていた。是非標準記録を突破し全カレで 12m50 を跳んで有終の美を飾ってほしい。

男子円盤投　上野 35m71　吉田 32m71　決勝に進めず

上野の資格記録は 38m01 でランク 7 位。吉田は 34m24 だが、二人とも資格記録を大きく下回った。特に上野は砲丸に続いての敗戦でさぞや悔しい思いをしているだろう。原因を分析して、これから夏・秋の試合で嫌な思いを払拭してほしい。

女子円盤投　麓 35m25　決勝に進めず

麓の資格記録は 36m03（本年 3 月）でランク 14 位。調子は上がっていた。しかしランク 8 位まで 3m60 の差があっては致し方ない結果だろう。彼女は投擲選手としての体格を供えスピードもありそうだ。40m くらい投げても誰も驚かないだろう。砲丸では高校時代の記録を更新できず苦しんでいるが、円盤ではまだまだ伸び代はあるように思う。
本日は男女 400M リレーの決勝があったが、そこに神戸大の名前がないのは寂しい限り。男子 2 部は阪大が見事優勝、タイムも 40 秒 44 という見事なもの。10 秒 7~8 が 3 人いる。1 部でも戦えるレベルだ。女子は優勝候補の甲南大がリードするも最終バトンパスでミスし大阪成蹊大が逆転、大会新(45 秒 06)で優勝した。しかしながら甲南大女子の短距離の充実ぶりは著しい。それが男子にも影響している感あり。

5 月 15 日(日)最終日

いよいよ大会最終日となった。今日も好天だ。今回の天気は 4 日間共快晴で大会の盛上げに一役買っている。得点争いは、1 部は関学が独走。2 部は天理が大量リード、阪大が続いているらしい。

男子 2 部 10000mW　岡野 52’39”61　8 位、 清原 56’ 57” 35

朝から、女子、2 部、1 部と競歩が 3 連発である。選手には申し訳ないが、早くて 40 分、遅いと 1 時間以上かかる競技を 3 レース続けて観るのは正直疲れる、などとこぼしている中、神戸大学からは 2 人の選手が出場。かなり暑く日差しも厳しい中、岡野君が粘りに粘り、正に納豆走法いや歩行で 8 位に食い込んだ。昨年度(8 位)に続いての入賞は立派。お疲れ様。清原選手はまだ日も浅いようで大きく遅れてしまったが、インカレ後王子の練習を覗きに行った際トラック 25 周を黙々と走り込んでいたのが印象的。大幅な自己新も期待できるかも知れない。来年に向け伸び代は無限だ。入賞を目指して頑張ってほしい。

男子 800m　植田 1’53”19　優勝（2 連覇）

レース前、植田と話したが「(同じ茨木高校の）丸ちゃん（丸岡）が（5000m）で優勝したから絶対勝たないとあきません」と言いながらも自信はありそうだった。それもそのはず植田の資格タイムは 1 分 51 秒 25 で 2 位とは 2 秒の差がある。1 部でも十分戦えるレベルだ。800m で 2 秒の差があるということは 2 段階くらい強さが違う。番狂わせが起きる可能性は殆どない。しかも昨年から 400m の記録を 1 秒近く短縮した。条件が揃えば 1 分 49 秒台を出してもおかしくないといころまで来ており死角はないはずである。1 周目 55 秒というちょうどいいペースで入った。植田はアウトコースの 3 番手くらいにつけ、いつでも対応できる好位置をキープする。本人もこの時点で勝利を確信したはずである。各レースを見ていると特に 800m、1500m では残り 1 周での位置取りが重要で、ポケットされて前へ出られずに敗れる有力選手もたまにいる。バックストレッチでペースが上がって行く。植田は 2 段階でスパートするものと思っていた。最後のギヤは直線まで取っておくということだが、残り 200m で植田が文字通りダッシュした。格の違いを見せつける圧倒的なスパートに見えた。あっという間に差が 10m と開き残り 100m。しかし後続も最後の鞭を入れ始め差がそれ以上開かない。残り 30m で差はまだ 10m。しかしここで植田の足が止まった。差が縮まってヒヤリとしかけたが最後は 5m の差をつけてテープを切った。後で聞くとスパートが少し早すぎたのと、400m の疲れがまだ残っていたようだ。しかし 400m が自己新の 5 位、800m で 2 連覇。主将の名に恥じない活躍だった。まだ成長していると自覚もしている。ひょっとして神戸大初の 800m　1 分 49 秒台ランナーが誕生するかも知れない。来年も走ってくれるであろう植田・丸岡の茨木高校コ

ンビから目が離せない。なお 800m ではランキングでは大阪市大が２，３位。いい選手がいる。

女子 800m 米田 2'14"52　5 位

米田は昨年 5 位に入り、普通なら今年は上位入賞だ、となるところであったが、先にも述べたように、高校時代に 2 分 10 秒を切っている 1 年生が 3 人もランキング上位を占める事態となっては、如何に入賞するかが重要となってくる。特にランキングトップの石塚の持ちタイムは 2 分 6 秒台であり次元が違う。昨年の優勝タイムは 2 分 13 秒だが、今年は 2 分 10 秒を切る高速レースが予想された。しかし超高校級の東大阪大の石塚が 400m、400mH、800m、400m リレー、1600m リレーにエントリーしており、最大 13 本を走るという過密スケジュールの中ではそうはならなかった。石塚は 400mH 終了後まだ 30 分しか経っていない時点での 800m 決勝である。最後は 1600m リレーが控えている。やはり前半 66 秒のゆっくりしたペースで通過。できるだけ省エネで優勝しようというつもりのようだ。米田にとっては悪いペースではない。米田も 400、800 型なので最後は自信を持っている。独特の少し飛び跳ねるような走法で元気に中盤をキープしている。2 周目で少しパースが上がり石塚が僅差でリードするが米田もなんとかついている。残り 150m になって石塚がやっとスパートに入り、楽々と差し切って彼女にとっては凡タイムの 2 分 12 秒台で優勝。米田は最後トップグループの競り合いからは遅れるも粘って 2'14"52 と自己記録に迫るタイムで意地を見せたが相当悔しがっていた。この気持ちの強さが米田の持ち味だ。
神戸大学の女子 800m は昨年度 2 人が入賞し、その後の対抗戦で上位を独占するなどお家芸になりかけていたが関西インカレに関しては様相が変わった、今の 3 人は 2 分 13 秒~14 秒の持ちタイムだが。これを 2 分 10 秒まで上げる必要がある。1600m リレーの練習も兼ねて 400m の記録短縮に努めるのが早道のような気がする。（それはそれで大変なことだが、単なる走り込み等では短縮は困難のように思う）
米田は西田の後を継いで女子主将を務め、1 年間良く先頭に立って引っ張った。小柄ながらファイターで
気迫あふれるレースぶりは皆の手本だ。伸び悩んでいる選手は練習態度も含め米田を手本にすればよい、
王子の練習では「近国体は 800、1500 です」と張り切っていた。駅伝も走るとのこと。頑張ってほしい。

10000m 丸岡 31'19"98　2 位、 桂 34'15"49

長距離の最後を飾る 10000m には、ハーフ 2 位、5000m 優勝と絶好調の 4 年丸岡と若手期待の 2 年桂の二人が出場。二人の持ちタイムは丸岡が 31 分 25 秒で 8 位、桂も 31 分 48 秒となかなかのものである。
しかし、このレースは大経大が 29 分 14 秒の高橋、30 分 01 と 02 の北原、山口の 4 年生トリオが圧倒的に強力。北原はハーフの優勝者でもある。しかもこの 3 人は 5000m を回避、10000m に絞っている。
丸岡は「大経大の 3 人は集団走をするだろう。4 位は最低確保だが 1 人は食って 3 位には入りたい」と言っていた。5000m もランキングでは 10 位ながら圧勝している。絶好調で意気軒高だ。気温も高く番狂わせが起きる可能性は十分にある。問題は持ちタイムで 1 分の差がある中で、集団走をするであろう大経大トリオについていくかどうかだ。さてスタートである。いきなりランキングトップの大経・高橋が格が違うとばかり飛び出した。しかし残りの二人はついていかない。それを見て 2 週目に入ると丸岡が追走し始めた。当然大経大の二人もペースアップする。早くからトップは独走態勢で、それを追う大経大 2 人と丸岡が第 2 グループ、残りが第 3 グループという余り見かけない展開となった。特に第 2 グループと第 3 グループの差がどんどんついていく。丸岡の積極性に身を見張る。ランキング以上の実力を目の前で証明しているようなレースだ。桂の様子がオカシイ。最初から大きく遅れだした。昨年度の駅伝では 1 年生ながらなかなかの走りを見せていたのだが・・・。結果自己記録より 3 分も遅れてゴール。何かアクシデントでもあったのではないだろうか？　駅伝に向け元気な走りを取り戻してほしいものだ。
レースは中盤を過ぎ、トップと第 2 集団はかなり離れているが、最初ほどの離れ方はしていない。バックストレッチでは給水テーブルがあり、選手たちは思い思いに給水している。時刻は 14 時過ぎ、一番暑い時間だ。丸岡の走りはしっかりしている。無理してついている風には見えない。むしろ虎視眈々と狙っているような雰囲気を感じる。最後にはあのスパートがある。大経大二人もそれは十分わかっているはず。後半が楽しみになってきた。
じっとついていけ、丸岡、という感じで見ていた。とすると 6000m に入る寸前、丸岡がスパート、みるみる大経大の二人を引き離し始めた。丸岡は 5000m の疲れも残っているし、ここで行かなくても、大丈夫か？と思った。丸岡に後で聞くと、横の二人がばてている様に感じたので行きました、ということだった。レース感も研ぎ澄まされている。いい時というのはそういうものなのかもしれない。大経大の一人が大きく遅れ、もう一人は 8000m くらいまでは追走の意思を見せていたがそこまで。最後はトップは 29 分台ランナーの力を見せて優勝。しかしタイムは 31 分 0 秒という平凡なタイム。丸岡は自己新の 31 分 19 秒。トップと 20 秒差に迫り 5000m に

続き会心のレースを見せた。大経大トリオにとっては大きな誤算だったのではないか？丸岡が 5000m と違うレースパターンで成長した姿を見せた。因みに丸岡は関西インカレ 1 週間後の 5 月 22 日のレースで 30 分 55 秒をマーク。乗ってます。

400mH 清水 54"08　5 位

神戸大にはしっかりした 400m ハードラーが 3 人いる。清水 54”48、藤原 54”69、川島 55”67。
いずれも 3 年。今回は残念ながら清水しか決勝進出がならなかったが、3 人そろって切磋してほしい。
清水は前半から積極的に行き自己新で 5 位入賞。ランキングは 10 位だったので会心のレースだったろう。関西インカレの場で、自己新を出し、ランキング上位を破り、入賞するというのは正に醍醐味だ。

棒高跳 吉田　記録なし

M1 の吉田は今回は棒高と円盤に集中。特に棒高は 4m の資格記録だがランキング 10 位は 4m40。少なくとも 4m20 は跳ばないと入賞は出来ない。通常は 3m 台から跳び始めるのだが、新しいポールも馴染み、調子も上がっており学内記録（4m50）も意識しながらの 4m からの試技開始となった。しかし記録なし。
かなりガックリきていた。勝負は時の運とはいえ跳躍競技はこれがあるから難しい。まだ機会はある。

走幅跳 藤井 5m48、 永久 5m40、 末廣 5m25

ランキングでは藤井 5m60（18 位）、末廣 5m60（18 位）、永久 5m46（27 位）と入賞は難しそうだが、
実はランキング 8 位は 5m82．特に藤井のベストは高校時代の 5m70、調子も上がってきており本人は自己新を出しての入賞をイメージしていた。しかし試技は 3 回。思うように記録が伸びず、3 人とも予選落ちとなった。
藤井は最終学年だったので相当の思い入れがあったようでさぞや悔しかったことだろう。しかし王子の練習で会ったら、近国体で 5m80 を目指します、と前向きだった。時間はあまりないかも知れないが心残りなく取り組んでほしい。頑張れ藤井！

やり投 上野 50m84 太田 51m17

資格記録は上野が 57m66、太田 52m84 でランキング 8 位が 61m97。槍は水物というが、やはり 60m は投げないと勝負にならない。しかし結果は上記の通り。今回はフィールドが跳躍・投擲共に低調であり、
それを象徴するような競技となってしまったが、まだまだ伸び代はあるはずだ。今後の精進を期待する。
雑談になるが、このところ長居での関西インカレは、メイン競技場がセレッソ大阪との兼ね合いで芝生が使えない。従って投擲競技は第 2 競技場に行かないと観戦できない。非常に不便。槍がキラキラ輝きながら 60m、70m と飛んでいくのを見るのは壮観だ。何とかならないものだろうか？

砲丸投 麓 12m32

麓は砲丸投げが本職。ランキングも 12m90 で 7 位と十分入賞圏内。高校時代には 13m35 という記録も作っている。しかし自己記録を大きく下回っての予選落ち。5 月 24 日に王子へ行ったが、練習開始前から黙々と砲丸を投げ込んでいる麓の姿が印象的だった。この 1 年、米田の後を受けて女子主将を務める。
非常に責任感のある前向きな選手だ。チームと自分を上手くバランスさせて頑張ってほしい。王子で話をしたら目標を語ってくれた。「先ずは 13m30 投げて全日本インカレに出場することです。最終的には 14m を投げて日本選手権にも出場したいです。来年の関西インカレでは砲丸、円盤共に上位入賞して 1 人で 10 点はとりたいと考えています。」その心意気や良し！である。

4×400mR 竹島-近藤-山田-植田 3′17″95　8 位

最後を締めるのは大会の華 1600m リレーだ。わが校は植田を除く 3 人が 2 年生。植田は今回 48 秒 19 まで記録を伸ばしたが、後 3 人は 50 秒台、2 部でも 4 人が 50 秒を切らないと勝負できない状況だ。竹島。山田は 200、400m ランナーだが、近藤は 100、200 型。最後まで持つかどうか？しかし 200m ランナーを決勝で使うという例は結構ある。米国女子のアリソン・フェリックスのマイル 2 走も見慣れた風景になったが、最初登場した時は鮮烈だった。今回の女子のマイルで、100、200 を制した甲南大の永野真梨子さんが 3 走で登場。バックストレッチのスピードは圧巻だったが、最後までスピードが落ちず甲南を下位からほぼトップへ押し上げた。神大はというと高校時代 21 秒 85 で走っている近藤を 2 走に使っている。200m ランナーをここで使うのはギャンブルでもあろうが、予選では何とか最後まで持ったので再度の爆走を期待したのだろう。神大の持ちタイムは 3 分 20

秒台で 10 位にも入っていないが、予選で 3 分 16 秒 75 をマークし予選通過記録では上位で決勝進出を果たしている。しかし、植田君に言わせると、1 枚抜いている学校も結構あるということなので予選順位は当てにならないらしい。ところで順番だが、最近は第 2 走者重視の傾向が出てきている。途中トップグループにいなければ勝負にならない。1 走で仮に出遅れても 2 走で追いついて、ということらしい。他校と違い植田の他 50 秒を切るランナーがいない状態では植田が 2 走に回る手もあった。昨年の女子は西田が常に 2 走で爆走していたのが記憶に新しい。しかし神大はオーソドックスにエースの植田をアンカーに置いた。結果は、1 走で出遅れ、2 走、3 走はバックでは前と詰めるが二人とも最後の 50m で足が止まり離されての最下位。下位でバトンをもらうとどうしても前半で無理をしてしまう。植田にバトンが渡った時点では 7 位とも大きな差があった。アンカーは他校も強い。植田が巻き返せるような状況ではなかったが、見せ場を作れなかったレースだった。
しかし 400m リレーに続き 1600m リレーも今後に期待を抱かせるような雰囲気が出てきたのは喜ばしい。事実予選の 3 分 16 秒 75 は明日につながる記録である。来年に期待しよう。やはりマイルが強くないと面白くない。因みにレースは 400m 覇者の三原君を擁する甲南大が 3 分 13 秒 88 で快勝した。来年は少しでも肉薄したいものだ。

最後に

かくして、延べ 5 日間にわたる関西インカレ 2016 は終了した。
総合順位は、男子が 64 点で 6 位、女子が 7.5 点で 17 位ということ男女とも残念な結果に終わった。
最後に来年を見据え少し総括してみよう。
この話は総会で現役から詳しく聞けるはずであるが、その前哨戦である。
男子に絞って話をするが、現役作成の資格記録順位での得点予想では、天理大 134 点、阪大 106 点、摂南大 88 点神戸大 68 点となっていた。（ただしこの得点にはリレーが加味されていないので注意。）これに対し実績は、天理大 160 点、阪大 140 点、摂南大 98.5 点、大経大 67 点、甲南大 67 点となり、神戸は 64 点 6 位となった。神戸は予想と差がないように見えるが、実はリレーを入れての短距離・400m 障害(0→9)、中長距離・競歩（38→48)、跳躍（15→3)、投擲（10→１)、混成（5→7）となる。トラックとフィールドでは、トラック（38→57)、フィールド（25→4)、混成（5→7）となり、トラックで 19 点増なるもフィールドでは 21 点減となった。しかも今回の得点獲得の構成は、植田（12 点、藤田 13 点、丸岡 22 点）と 3 人で 47 点を稼いでおり(リレー除く)、これに十種の宮崎（7 点）まで加えると、4 人で 54 点（64 点の 84%）を占める。非常にいびつな構成だ。これは中長距離のエースたちが予想を超えて頑張った反面、跳躍・投擲がほぼ壊滅状態だったという側面を持つ。しかし仮に 64 点に跳躍・投擲を 20 点上積みしても 84 点。今年は頑張ってもそのくらいが上限で、やはり 1 部昇格の最低条件である 100 点を獲得する実力はなかったと言わざるを得ない。しかし一昨年 38 点を取った短距離陣がごそっと抜けた穴が全く埋まっていない状態からは脱したとは言える。400m、及び 400mH でも得点でき、また 100m、200m でも 2 年生が準決に進出。リレーでも 400m こそバトンミスで予選落ちしたが、まともに走っておれば下位ではあるが入賞していただろう。1600m リレーでは予選のタイムは昨年より 3 秒も改善され決勝に進んだ。さて来年である。
一部に昇格した天理大、大阪大に変わって、びわスポ大、龍谷大が降格してきた。この 2 校はやはり強そうだ。さてわが校はというと、昨年・今年よりかなり上位に接近している。2 年生も育ってきて弱点の短距離も克服しつつある。更に今年の新入生には有望な選手が何人もいる。今年に比べかなりの戦力アップは間違いない。しかしながらそれ以外の他校も侮れない。今回の記録等から見ると、摂南大を筆頭に大阪経済大、甲南大、大阪国際大辺りとは接戦の可能性も十分ある。この 2 年のように大差をつけられての 4 位や 6 位ではなく、仮に昇格できずとも上位校といい勝負をしてもらいたい。まずはそこからだろう。
最後の 1600m リレーまで勝負の行方が分からないくらいの熱戦を観てみたいものだ。
孫子に曰く「敵を知り己を知れば百選危うからず」。
一部昇格に向け現役諸君の一層の奮闘努力を期待する。

以上